

令和 6 年 6 月 15 日現在

機関番号：24506

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K01864

研究課題名（和文）社会問題に関するテレビニュースとドキュメンタリーにおける考え方の枠組み構築

研究課題名（英文）The Construction of Interpretive Frameworks in Television News and Documentary on Social Issues

研究代表者

糟屋 美千子（Kasuya, Michiko）

兵庫県立大学・環境人間学部・教授

研究者番号：20514433

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、社会問題の解決を目的とするクリティカル・ディスコース分析（CDA）のアプローチを用いて、社会問題を取り扱ったテレビニュースとテレビドキュメンタリーを分析し、考え方の枠組みがどのように構築されているかを分析した。その結果、テレビニュースとテレビドキュメンタリーのディスコースの言語的要素や非言語的要素の相互作用により、特定の考え方が形成されるメカニズムを明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、社会問題に対して異分野と考えられてきた言語学的アプローチを用い、言語的要素だけでなく、非言語的要素（映像や音響）も含めて、イデオロギー構築を仕組みを検討したこと、また、主流メディアとされるテレビニュースと、根源的なテーマを深く掘り下げることで新たな視点をもたらす可能性を持つテレビドキュメンタリーを比較分析したことで、テレビ報道のディスコースのイデオロギー構築の分析を具体化・多面化した。

研究成果の概要（英文）：This study examined the discourse of Japanese television news and television documentary that reports on social issues. It uses critical discourse analysis as an approach to decipher ideologies produced by the discourse. Based on a multi-modal approach, it investigates various linguistic and nonlinguistic elements and revealed how the discourse works to create specific interpretive frameworks by the complex interaction of several linguistic and non-linguistic discourse elements.

研究分野：メディア・ディスコース研究

キーワード：クリティカル・ディスコース分析 テレビニュース テレビドキュメンタリー イデオロギー 社会問題 マルチモーダル

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的背景としては、まず、テレビニュースが環境、医療、福祉、労働、人権などの様々な社会問題に関する人々の考え方に及ぼす影響の大きさが指摘され、報道の偏向性が議論されてきたことがある。また、テレビニュースは、言語面だけでもレトリック・語彙・語法など様々な要素が複雑に組み合わせられているが、それに加えて、非言語的要素(映像・音響など)が相互作用してイデオロギーを構築している。しかし、メディア研究の分野では、日本の社会問題に関するテレビニュースによるイデオロギー構築を、言語学的視点から微細かつ多面的に分析するマルチ・モダリティ分析の枠組みの作成は、まだ始まったばかりである。

一方、テレビドキュメンタリーについては、主流メディアとしてのテレビニュースでは見えにくい部分を取り上げることで、新たな事実や視点を伝え、根源的なテーマを深く掘り下げることができるという定評があり、そのメッセージがもたらす社会的意義の重要性が指摘されてきた。しかし、その番組の長さや複雑性により、これまで日本のテレビドキュメンタリーのディスコースが微細に分析されることはほとんどなく、ドキュメンタリーの言語や映像の使用によって考え方の枠組みがどのように作られているのかはいまだに解明されていない。

## 2. 研究の目的

本研究は、クリティカル・ディスコース分析(以下 CDA)という言語学的アプローチを基盤に、日本のテレビにおける、社会問題に関するテレビニュースとテレビドキュメンタリーを分析し、現代社会の考え方の枠組みが、テレビニュースやテレビドキュメンタリーの言語や映像などの相互作用により、どのように構築されているか、というイデオロギー構築の仕組みを解明することを目的とする。そして、テレビニュースとテレビドキュメンタリーを比較検討することで、ディスコースの言語的要素と非言語的要素の複雑な相互作用を多面的に見て、視聴者に社会問題の本質を伝え、また様々な立場の人々の福利に貢献できるようなテレビニュースやテレビドキュメンタリーはどのように創出されるのか、についての新たな視点を探求することを目指す。

## 3. 研究の方法

本研究の分析アプローチである CDA は、ディスコースに言語使用、視覚イメージ、音響を含め、社会問題を作り出す考え方や価値観がどのように構築されるかを解明し、ディスコースによって生じる不均衡な力関係や矛盾などを解決していくことを目指す。本研究の分析に際しては、録画したテレビニュースとテレビドキュメンタリーから、社会問題を扱ったものを選び、分析対象とした。そして、キャスター・レポーター・ナレーター・インタビューの言葉、映像・音響などを書き起こし、それらの中から、特定の考え方を作り出していると考えられる言語的要素(情報の選択、話の展開、語彙や語法など)及び非言語的要素(映像・音響など)を抽出し、それらの要素によって、どのように考え方が構築されているかを分析・考察した。

## 4. 研究成果

本研究において、テレビニュース、テレビドキュメンタリーのディスコースの分析・比較を行なうことで、以下のことが明らかになった。

### (1) テレビニュースの分析

賛否両論のあった「TPP 大筋合意」を報じたテレビニュースを分析し、考え方の枠組みの構築の複合的メカニズムを解明することを試みた。分析の結果、ニュースのディスコースにより「TPP 大筋合意」という出来事について合意を支持する解釈の枠組みが作られており、さらに、この出来事そのものの解釈を超えて、政策について人々は一方的に影響を受ける存在であるという考え方や、人々の関係性が対立しているという見方など、一面的で限定的な枠組みが構築されていたことが明らかになった。こうした考え方の枠組みは、情報の選択、話の展開、語彙・語法、視覚的要素などのディスコースの要素の複雑な相互作用によって、重みづけ、因果関係、登場人物の属性などが一面的・限定的に描かれ、それらが互いに結びつき強化し合うという複雑な仕組みによって構築されていた。また、ディスコースの要素の1つ1つは特定の考え方をはっきり示してはいないが、すべての要素が一貫して同じ考えを作り出すことで、根拠や説明が十分に示されないまま、他の様々な考え方の可能性が排除され、特定の考え方が、疑う余地のない唯一の考え方であるかのように表されていたことが明らかになった。(「テレビニュースにおける枠組み構築の複合的メカニズム 「TPP 大筋合意」の報道のクリティカル・ディスコース分析から」社会言語科学, 25(1), pp.182-197, 2022)

### (2) テレビドキュメンタリーの分析

「諫早湾干拓問題」に関わるテレビドキュメンタリーを分析し、どのような考え方の枠組みがどのように構築されているかを検討した。その結果、干拓事業によって引き起こされた人々の暮らしの変化と苦難というテーマが、情報の選択、話の展開、語彙・語法、映像など、様々なディスコースのレベルで具体的に厚みを持って語られていたことがわかった。まず、ナレーションや

登場人物による出来事についての具体的で詳細な説明に、人々の語りの際の表情や音声、映像などの相互作用が加わり、人々の置かれた厳しい状況が多層的に伝えられ、様々なことを連想させるようになっていた。また、各部分が詳細に描写されることで、部分同士が結びつき、つながりやすくなっていて、ある場面である人や出来事について語られていたり、映像としてあったりしたものが、別の場面の別の人や出来事の理解を助ける働きをしていた。さらに、出来事の関係者を広範囲に多面的に取り上げ、弱い立場に置かれている人々の声をていねいに長期間にわたって拾い、その声の背景にあるものを掘り下げていた。その結果、人々がどれだけのものを失い、また何を望んでいるのかを想像することや、この事業に翻弄されてきた人々に共感し、自分自身が同じように抱える問題を振り返り、この問題を自らの問題として考えるきっかけを与える可能性を持つものとなっていた。(「テレビドキュメンタリーはどう描いたか：諫早湾干拓問題に関わる報道のディスコース分析」兵庫県立大学環境人間学部研究報告, 24, pp.183-202, 2022)

### (3) テレビニュースとテレビドキュメンタリーの比較 1

2022年5月15日の「沖縄本土復帰50年」に関わるテレビニュースとドキュメンタリーを分析対象とし、特定の考え方がニュースとドキュメンタリーによってどのように構築されているかを分析・比較した。テレビニュースにおいては、話の展開として「問題 - 解決」パターンがあり、その「問題 - 解決」パターンに合わせて情報が選ばれ、語彙・語法、映像・音響が使われていたことが明らかになった。そして、情報の選択や、語彙・語法、映像・音響の使用を貫く特徴として、具体性がないことで、人間の存在が背景化され、責任の所在が不明確になり、実際の問題が軽く扱われ、問題の本質が見えにくくなっていることが抽出された。

一方、同じテーマを同時期に扱ったテレビドキュメンタリーでは、登場する人々はそれぞれが重要な存在として描かれ、人々の具体的な経験に基づいた考えや行動が伝えられていた。また、日常の暮らしに基づいて未来を考えることを重要とする人々の姿など、他者をつなぎ、自分たちの手で未来を切り開こうとする姿勢が伝えられていた。さらに、映像などを通じて視聴者に人々が直接語りかけるような印象を与え、視聴者に対して様々な問題に自分はどのように関わっていくのかという問いを投げかけるものとなっていた。(「テレビ報道のディスコースは「沖縄本土復帰50年」をどう伝えたか」兵庫県立大学環境人間学部研究報告, 25, pp.61-80, 2023)

### (4) テレビニュースとテレビドキュメンタリーの比較 2

「福島第一原発事故」から12年目のテレビニュースとドキュメンタリーを比較検討した。その結果、テレビニュースが、政府の政策を支持する考え方の枠組みを構築していること、また、その枠組みが「政策に対する反対意見の軽視」「目的を根拠とした承認」「具体性による肯定的評価」「言及しないことによる前提化」「政策によって影響を受ける人間の存在の背景化」「政策に責任のある人間の存在の背景化」「出来事の因果関係の時間的・空間的切り取りによる問題の矮小化」などの仕組みによって構築されていることが明らかになった。テレビニュースにより、反対意見の存在が軽く扱われ、政策にはやむを得ない重要な理由があるとして承認され、政策に具体性を持たせ、望ましいと暗示する表現の繰り返しで肯定され、言及しないことで暗に承認・前提化されていた。一方で、反対の根拠となりうるような、被害を受けた人間の存在が背景化され、また、責任のある人間の存在が背景化され、現在進行中の問題については、因果関係が時間的に切り取られ、影響の範囲が空間的に狭く限定されて、問題が矮小化されていた。

同時期に同様のテーマを政策に反対の立場を取り続けてきた被害者の立場から見たドキュメンタリーでは、政策に対する疑問が提示され、反対の理由が具体的に上げられるなど、反対意見が重要なものとして扱われていた。また、人々が政策によって失ったものが具体的に伝えられたあとで、1人1人の具体的な困難や苦しみも伝えられ、問いを投げかけ、考えることを促していた。そして、出来事の因果関係が長い期間にわたって描かれ、責任のある存在があることが明示されていた。さらに、他の被害者とのつながりが示されることで、出来事の影響の時空が広く設定され、この問題が現在だけの特定の地域の問題でないことが示されていた。(「福島第一原発事故から12年目のテレビニュースにおける考え方の枠組みの構築 クリティカル・ディスコース分析からのアプローチ」兵庫県立大学環境人間学部研究報告, 26, pp.149-168, 2024)

以上のように、本研究では、社会問題をテーマとするテレビニュースとテレビドキュメンタリーのディスコースの分析により、どのような考え方の枠組みがどのように構築されているかを分析・考察した。テレビニュースには、政策の立場から報道され、人々の存在が背景化され、視聴者が情報を受け取る受け身の存在とされるという特徴があった。一方、テレビドキュメンタリーには、人々の視点から困難な状況や未来への願いが具体的に語られて、視聴者が自分自身の問題として考えることを促すような特徴があった。さらに、同時期に同様のテーマを取り扱ったテレビニュースとテレビドキュメンタリーを2つの事例で比較することで、これらの違いが明確になり、ニュースを問題の本質を捉えたものにしていくための手がかりを得ることができた。

本研究では、テレビニュースとテレビドキュメンタリーの比較検討により、社会問題に関する考え方構築の仕組みを明らかにし、分析フレームワークを微細化・多面化することができた。こうした研究は、まだ始まったばかりであり、今後もデータの数を増やし、その仕組みを詳細に解明していくことで、人々の福利の向上に貢献できるテレビ報道とはどのようなもので、どのようにしたらそれが可能になるかの検討を深めていくことが必要である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 糟屋 美千子	4. 巻 25
2. 論文標題 テレビニュースにおける枠組み構築の複合的メカニズム - 「TPP大筋合意」の報道のクリティカル・ディスコース分析から -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 社会言語科学	6. 最初と最後の頁 182-197
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.19024/jajls.25.1_182	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 糟屋美千子	4. 巻 25
2. 論文標題 テレビ報道のディスコースは「沖縄本土復帰50年」をどう伝えたか	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 兵庫県立大学環境人間学部研究報告	6. 最初と最後の頁 61-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 糟屋美千子	4. 巻 24
2. 論文標題 テレビドキュメンタリーはどう描いたか - 諫早湾干拓問題に関わる報道のディスコース分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 兵庫県立大学環境人間学部研究報告	6. 最初と最後の頁 183-202
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 糟屋美千子	4. 巻 26
2. 論文標題 福島第一原発事故から12年目のテレビニュースにおける考え方の枠組みの構築 - クリティカル・ディスコース分析からのアプローチ	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 兵庫県立大学環境人間学部研究報告	6. 最初と最後の頁 149-168
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------